

[研究ノート]

# 風水モデルを活用して 景観秩序を解釈する地理学習

沖縄県小浜島と韓国公州市旧市街を事例にして  
The Analysis of Fengshui-Landscape in Order on  
Geography Education

齋藤 之誉  
Yukitaka Saito

1. はじめに—国際社会で問われる地理的能力—
2. 風水景観—景観の相貌が一変する風水の環境認識—
3. 風水景観を解釈する概念装置
4. 沖縄県小浜島の風水景観—島嶼地域の風水—
5. 韓国公州市旧市街の風水景観—内陸盆地の風水—
6. おわりに—風水景観の地域性—

キーワード：国際社会、地理的能力、風水景観、環境認識、地域性

## 1. はじめに—国際社会で問われる地理的能力—

1976（昭和 51）年 9 月 12 日に、鶴飼で知られる岐阜市近郊の長良川中流域の地域は、大規模な水害に見舞われた。後に「9.12 水害」と呼ばれるようになった水害である。台風 7617 号に伴う集中豪雨によって濃尾平野を流下する長良川の水位が上昇し、安八町で堤防が決壊した。水害を深刻にした事情は、これだけではなかった。

長良川に合流する多くの支川では、本川に排出できなくなった河川の水があふれ出して内水氾濫を起こした。いっせいに氾濫した中小の支川の水は、周辺よりわずかに低く、鍋底のような凹地の景観を呈する後背湿地に湛水した。このとき、最も深刻な水害を被ったのが、高度経済成長期以降に岐阜市近郊の水田地帯に造成された新興住宅団地であった。聞き取り調査によれば、湛水深が 3m を越えた場所もあった。各所に配置された排水能力 10～35 m<sup>3</sup>/秒をもつ巨大なポンプを稼働させても、排水が追いつかなかった。

岐阜市近郊では、昭和 50 年代初頭に大規模な団地の造成が行なわれた。都心に通勤・通学するのに便利な大都市近郊に、安価でまとまった面積を提供できる土地が水田として保存されてきたからであった。そのような水田地帯は、内水氾濫によ

る水害が発生した場合に長時間にわたって湛水するため、被害が甚大になる。こうした危険な場所について、世代を超えて経験則を培ってきた農家と古くからの住民は、危険度の高い後背湿地の地形を水田にあて、周辺より小高い自然堤防の地形上に住宅を建てる知恵によって対処してきた。

この現象を地理的な観点から意味づけるとすれば、「古くから定住してきた住民は、水害に見舞われる頻度と程度の異なる地形環境を、土地を使い分けることによって巧みに住み分けてきた」と解釈することができるであろう。現地を訪問して聞き取り調査をしてみると、「土地を買うときには、雨の日に見てから買え」という言い伝えが保存されていた。また、地形環境の「住み分け」と「使い分け」を実践してきた農家からは、水害の際にも「玄関の手前の庭先までしか水は来なかった」という証言を得た。収集した情報を地図化して分布図を作成すると、それまでに気づけなかった規則性とパターンが見つかる。「どうして、このような分布パターンを示すのか」という素朴な問いが起点になって、地理的な追究が始まる。

聞き取り調査だけでなく簡易測量を合わせて実施すると、地形環境の「住み分け」と「使い分け」を裏付ける土地の起伏の状態に関する資料を収集し、地図化することができる。自然堤防の地形に立地し、神社や寺院のある古い集落では、路地を歩いてみると経験則に基づいて判断された盛土の上に住宅が建てられている。住宅の盛土は、①地形環境に対する住民の防災に関わる安全度の評価と環境認識、②過去の水害時の湛水深の記憶、③経済力と社会的地位、等を記録した風土の表現体であることがしだいに見えてくる。こうした表現体の観察、地図化、分析の作業を通して、表現体に結晶した住民の知恵を発見し、そこに表われた「その土地らしき」や地方色を考察するところに、地理を学ぶ醍醐味的一端がある。こうした地理を学ぶことの醍醐味について、デムコ (Demko, J. George) (1997) は、次のように書いている。

「地形や天然資源や穀物の産地についての知識だけが地理学なのではない。また河川や砂漠を世界地図の上で確認するだけのものでもない。(中略) いいかえれば、人間と地球とが織り成す終わりなきドラマ、つまり果てしなく変化する世界を理解しようともせずに、リストの羅列のみを地理学と考えるなら見当はずれもはなはだしい。(中略) 「真の」地理学とは、場所を対象とした人文科学であり自然科学であって、空間的パターンと変遷を探求するものである。(中略) なぜそこでそうなるのか? どんなプロセスで分布が変わるのか? 地理学とは森羅万象がそこで起こる事由にかかわる学問である。(中略) すべてのものは空間的で、空間に位置するのであるから、すべては空間的意味合いをもつ。ある場所とほかの場所が互いに影響しあうとき、位置はきわめて重要な要素となる。(中略) すなわち『地理学』とは、ある場所とそこにいる人々に影響を与えるすべての作用を理解し、説明して対処することのいっさいを指す。地理学の本来の意味がわかると、以前とはちがった目で世界を見るようになる。」<sup>1)</sup>

1) デムコ、George J. (1997): 『地理の世界へようこそ—数億年の地球物語—』、心交社、pp. 4-14.

テムコが指摘したように、「地理学の本来の意味がわかると、以前とはちがった目で世界を見るようになる」のである。田中（1929）は、テムコとは角度づけを変えて、地理を学ぶ意味について次のような見解を示した。

「他人の活動を見ても新聞や書物や話で色々の事を知つても、其の地域が解れば了解が早い。然もそれは環境を含んでの了解であつて単なる孤立した知識ではない。人は如何なる職業に従事して居てもその環境の支配を受けぬことはない。その環境との関係を知つて居ることはどの職業に従事するにも能率のあることである。それと同時に地図によつて各種の分布の様式及地理的理法を発見する能力を養ふのである。それは未知の他の地方の地図を見た時に応用のきくものでなければならぬ。」<sup>2)</sup>

田中が指摘したように地理的能力は、どのような職業に就いても重要な能力である。住宅や土地を購入するとき、50年ないし100年に一度の頻度で水害を被ることは、生涯に一度以上の確率で生命と財産が危機にさらされることを意味している。コンビニエンス・ストアを経営する場合には、商圈、時間帯別の客層と売れ筋商品、交通環境、競合店の立地等の社会的条件を十分に検討したうえで、立地を決定する必要がある。まして言語も文化的背景も異なる外国で活動する場合には、当該地域の自然的条件と社会的条件に十分に精通することが求められる。

どのような職業についても、環境の支配を受けずにはいられないのである。田中が指摘したように、これから活動しようとする場所の条件に精通することは、どんな職業に従事しても能率を上げることにつながる。このことは、国際社会で活躍することが求められる者にとって、地理的能力をいつでも使うことのできる道具として体得しておくことが必須の条件となることを示唆している。このような立場から、地理を学ぶときの観点を論じたのが、小学校教員であった及川平治である。及川は1912（大正1）年の著作の中で、次のように書いている。

「地理研究の重大問題は、物的環境をして人類のために最もよく作用せしむるには吾々は何事を為すべきか？ の解決にある。地理科において理法を発見し法則を定立しようとするは、畢竟、此の問題解決の動機より起るのである。地理科学習の目的は、人類が物的社会的環境に対して如何に順応しつつありやを知るに止まらず、其の順応（交渉過程）の完否、巧拙を評価するにある。換言すれば物的環境の利用程度を批判し、以て将来の生活のために（1）此の物的環境の可能性は何ぞや、（2）物的環境と住民との交換過程は十分なりや、（3）将来其の地方住民と如何なる社会生活（交渉過程）を営むべきかを決定するやうでなければならぬ。」<sup>3)</sup>

及川が地理を学ぶときの観点として重視したのが、①学習対象地域における住民の「環境との交渉のしかた」の巧拙を評価すること、②生活の舞台となっている環境のもつ潜在的可能性を吟味することである。このような観点から、前述した後背

2) 田中啓爾（1929）：『地理教育に関する論文集』、目黒書店、p. 120.

3) 及川平治（1912）：『分団式各科動的教育法』、弘学館、p. 540. なお本稿では引用に際して、明らかに誤植であると判断できる箇所には訂正を行なった。

湿地に造成された新興住宅団地の事例を診断するとき、次の2点を指摘することができる。第1に、新興住宅団地の開発者は、安価な土地と既存の大都市への交通の利便性という社会的条件を最優先して、後背湿地のような水害の危険度が高い場所に団地を造成した。このことは、周辺の自然的条件への配慮を欠いており、環境との交渉の在り方は十分でなかったと評価することができるだろう。第2に、後背湿地の地形環境は、河川が地質学的なスケールで洪水を繰り返して地形を造成してきた自然の営みの舞台である。後背湿地は、洪水による水害と切り離して考えることはできない場所なのである。だからこそ、古い農家は危険度の高い後背湿地を、あえて水田のまま利用することで、地形環境に適応する生活様式を経験則として確立したのである。このような土地に、あえて住宅を求める場合には、十分な高さの盛土の上に住宅を構える必要がある。それが、水害から生命と財産を守るために、自然的条件を加味して生活を営む知恵であろう。

今後の21世紀の国際社会では、地球的規模で生起する「地球の温暖化」をはじめとする環境問題への対応と決断が求められることになる。「地球の温暖化」の問題においても、その現象の具体的な表われかたは世界各地で必ずしも一様ではない。具体的な問題ごとに、場所に即して対応することが求められる。このときに必要な思考の道具となるのが、地理的能力なのである。デムコは、「地理学の本来の意味がわかると、以前とはちがった目で世界を見るようになる」ことを指摘した。眼の前の景観が、地理を学ぶ前後で見え方が変わるとは、どういうことなのであろうか。ここでは風水を手がかりにして、考察を進めてみよう。

## 2. 風水景観—景観の相貌が一変する風水の環境認識—

### (1) 龍脈が生み出す景観秩序

東アジアでは、1980年代後半から「風水ブーム」「風水熱」と呼ばれる現象が起きている。わが国の学問としての風水研究は、これまで風水思想の問題は思想史の分野が担当し、風水史は東洋史の分野、風水診断に基づいて整備された都市や墓所は地理学と建築学の分野、風水の民俗については民俗学と社会人類学の分野という具合に細分化が進んだ。その結果、風水の全体像を捉えることが難しくなり、どの分野も研究活動が停滞する傾向にあった<sup>4)</sup>。

この状況を打開するために、1989(平成元)年に全国風水研究者協議会が発足して、学際的な共同研究が進められるようになった。その成果が、1990年代に相次いで出版された<sup>5)</sup>。すると風水占いもブームを迎えた。「旅行風水」「仕事風水」「インテリア風水」「恋愛風水」等の多様な開運術を紹介する書籍の出版が隆盛期を迎えた<sup>6)</sup>。書店では、風水研究の専門書と占いの書籍が、同じ棚に並べられるよう

4) 渡邊欣雄(2001):『風水の社会人類学—中国とその周辺比較—』、風響社、pp.17-26.

5) 代表的な学際的共同研究の成果には、窪徳忠編(1990):『沖縄の風水』、平河出版社、323p、渡邊欣雄・三浦國雄編(1994):『環中国海の民俗と文化4.風水論集』、凱風社、542p、目崎茂和(1998):『図説風水学—中国四千年の知恵をさぐる—』、東京書籍、223p、聶莉莉・韓敏・曾士才・西澤治彦編(2000):『大地は生きている—中国風水の思想と実践—』、てらいんく、290p等がある。



になった。わが国では、研究者による学術研究と風水師による占いが、風水ブームの中で混同される現象が起きた。この事態に直面した研究者は、風水という文化が誤解・曲解される危険性があると警鐘を鳴らしている<sup>7)</sup>。

こうした経緯で風水が注目されるようになったとき、ビジネスと風水が密接に結びついた香港風水を取り上げて、住民の生活に深く根ざす中国風水を紹介したのが荒俣(1994)であった<sup>8)</sup>。では占いとは異なる本場の風水とは、どのようなものであろうか。荒俣は、香港の中環地区における風水の実態を取り上げて、地相占術として紹介した。風水では、中国のチベット高原の北に位置する崑崙山に大地の気のエネルギー(以下では「生气」と記す)の湧き出し口があると考えてきた。そこから湧き出した生气は、中国内で3本の流れ(以下では「龍脈」と記す)を形成し、そのうちの1本が福建省と広東省を経て、香港のビクトリア・ピーク(太平山)に到達する。龍脈は、この場所で更に5本に分流するが、その中の最も強い生气をもつ龍脈が中環地区を流れていると考えられてきた<sup>9)</sup>。

龍脈そのものは、肉眼で捉えることはできない。しかし龍脈の流れる地点と、高台から眺めることのできる中環地区の都市景観と重ね合わせるようにして観察することは可能である。すると龍脈が通過する場所に、香港の政治・経済の要となる重要な施設が、有意味に分布していることに気がつく。イギリスの旧香港総督府をはじめ、最高裁判所、香港上海銀行と中国銀行が、まるで龍脈が運んできた生气を奪い合うように立地しているように見えるようになる。この分布現象に気がつく、高台から眺める香港の都市景観は、龍脈の生气を独占することで業績をあげ、繁栄を図ろうとする「風水景観」に一変する。本稿では、香港の中環地区の事例のように、風水が秩序を生み出した景観を「風水景観」と呼ぶことにする。

ベルク(Berque, Augustin)(1985)が指摘したように、それぞれの社会は、その文化特有の総合秩序によって空間を組織しており、独自の空間的特性をもっている<sup>10)</sup>。香港の都市景観は、風水によって空間が組織されており、香港ならではの空間的な地方色をまとっているのである。

風水の知識を持つ人と持たない人とは、眼の前の都市景観がまったく違ったものに見えているのである。一見すると複雑で混沌とした香港の都市景観が、実は眼に見えない龍脈によって秩序づけられてきた事実を発見したときの、素朴な喜び、驚きと感動体験こそ、地理を学ぶ醍醐味の一部であろう。また、誰かの価値観で現実の一部を切り取ってパッケージした文献に頼るだけでなく、現地調査を通して、現実に生起する現象から学び、現地で眼の前の景観の相貌が一変してしまう風水カルチュア・ショックを体感することにも、地理を学ぶ醍醐味がある。それでは、香港の風水景観の具体例について考察を進めてみよう。

6) 李家幽竹(2002):『色彩風水』、ワニブックス、112p、李家幽竹(2002):『幸せになる旅行風水』、角川春樹事務所、186p などがある。

7) 前掲書(4)、pp. 17-21.

8) 荒俣宏(1994):『風水先生—地相占術の驚異—』、集英社、309p.

9) 前掲書(8)、pp. 26-30.

10) ベルク、オギュスタン(1985):『空間の日本文化』、筑摩書房、291p.

## (2) 香港風水戦争

香港を中国に返還する中英共同声明が調印されたのは、1984（昭和59）年12月のことであった。この頃から注目を集めるようになった香港風水戦争は、景観に秩序を生み出す文化としての風水の問題に対して地理教育の立場からアプローチするうえで、重要な観点を提起した。

海岸の平坦地に高層ビルが集積する香港では、オフィス・ビルの立地条件についての風水診断の良し悪しが、企業の業績を左右すると考えられている。このため多くの経営者は、風水師を雇って可能な限り条件の良い場所にオフィスを構えてきた。オフィスの風水診断を良くするために、間取りだけでなく、事務機器の配置・色・方位等、インテリアの細部にまで気を配る習慣が浸透している。

このような土地柄の香港で、中国返還が近づいた1980年代後半から話題となったのが香港風水戦争である。その発端は、風水診断のうえで最も理想的な場所だと見なされている香港の中環地区に、イギリスが風水と建築学の粋を凝らした香港上海銀行の47階建て新社屋を建てたことである。すると、隣接する場所に今度は中国が中国銀行の70階建て新社屋の建設を始めた。一方の香港上海銀行は、イギリスの香港政庁の下で準中央銀行の役割を果たしてきた銀行であった。他方の中国銀行は改革開放政策の下で、外国為替銀行の役割を果たしてきた銀行である。風水診断が経済活動にまで浸透している香港では、国家を代表する機関が建てた銀行の風水診断の良し悪しは、そのまま国家の盛衰にも関わると住民に認識される。

住民が見守るなかで、香港上海銀行の新社屋は1986（昭和61）年に完成し、中国銀行は1989（平成元）年に完成した。ところが完成した香港上海銀行の建物は、次の3つの特徴を備えていたことが、風水診断のうえで問題視されることになった。第1に、1階が吹き抜けの構造にされたことである。このような構造は、土地利用のうえで余裕のない香港の社会通念から、大きく逸脱するものであった。第2に、1階の吹き抜け部分の床面が山側から海側に向けて凹凸をつけて傾斜する構造になっていたことである。第3に、1階から2階に続くエスカレーターが龍の舌を模していたことである。第4に、建物の概観が海底油田を掘削する櫓を模していたことである。

このようなイギリス資本の香港上海銀行の建物は、チベット高原から九龍半島を経て中環地区に到達すると考えられている龍脈の真上に位置している。この景観は風水に詳しい香港の住民にとって、イギリスが龍脈の生気を独占するための装置に見えたことが報告されている<sup>11)</sup>。すると中国銀行は、風水によって対抗するために、①イギリスの香港政庁と香港上海銀行に刃物を向けているように見える三角形の鋭角的なデザインを新社屋に採用し、②風水診断では不和の象徴とされる三角形の黒色のミラー・ガラスを壁面全体に施した。こうした中国銀行側の対応は、香港の住民にとって、龍脈の生気を独占しようとする香港上海銀行の運気を断つための風水による対抗手段の仕掛けに見えたことが報告されている<sup>12)</sup>。これが、イギリス

11) 聶莉莉・韓敏・曾士才・西澤治彦編著『大地は生きている—中国風水の思想と実践—』、てらいんく、pp. 74-86.

資本と中国資本の2つの銀行の間で行なわれた香港風水戦争であった。

香港の住民は、高層ビルが林立する混沌とした都市景観と、企業が龍脈の生気を巧みに取り込んで繁栄しようと活動する景観、あるいは殺気を放って競合する企業の運気を断とうと活動する景観を重ねて見ているのである。風水の知識を持つ者と持たない者では、香港の都市景観から読み取ることのできる情報の質と量に、明らかな差異が生じるのである。

ところが、風水が景観を形成する文化として定着したのは、中国だけではない。中国から伝播した風水は、周辺地域に伝わるとともに、土地の自然的条件と社会的条件に巧みに適応しながら、17世紀以降の琉球王国時代の日本にも定着したのである。沖縄本島や周辺の離島を訪れたことのあるかたは、香港風水とは異なる沖縄独自の風水が、島の景観を形成するうえで重要な働きをしていることに気づかれたであろうか。本稿では、島嶼地域である沖縄県小浜島と、花崗岩からなる起伏の大きい内陸盆地が卓越する韓国公州市旧市街を訪ねて、2つの異なる地域の風水景観を考察する。そのために、風水景観の意味を解釈する思考の道具を組み立てておく必要がある。

### 3. 風水景観を解釈する概念装置

#### (1) 記号論的環境認識装置としての風水

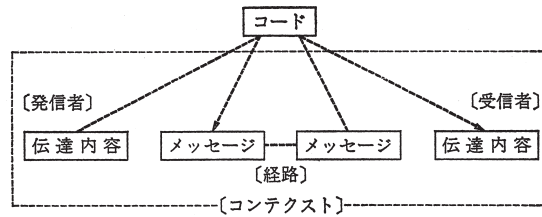
「人間とは何か」という問いに対する解答の1つは、ことばを使ってコミュニケーションを行なうことである。人間は好むと好まざるとに関わらず、社会の中に生まれ、人間関係の中で生活する。このような関係を築いたり維持したりしながら社会生活を営むためには、多様なレベルでコミュニケーションを行なうことが必要不可欠である。その際に、ことばという記号が重要な手段となる。ことばを使うコミュニケーションのしくみを解明する作業に取り組んできたのが、記号論の研究である<sup>12)</sup>。

第1図は、ことばによるコミュニケーションの場を構成する要素とメカニズムを示したものである。模式的なコミュニケーションの場は、「発信者」と「受信者」の間に、「伝達内容」「メッセージ」「経路」「コンテキスト」「コード」が介在して成立する。ことばによるコミュニケーションは、まず発信者が伝達内容を共有されているコードに従ってメッセージを作成する。次に、メッセージは経路をたどって受信者に届けられる。受信者は、発信者と共有するコードを使ってメッセージを解釈して、発信者が意図した伝達内容を認識するという図式が成り立つ。

ところが本稿で着目する風水景観の場合は、景観を解釈しようとする受信者の存在を想定することはできるが、「発信者」を第1図に示したモデルのように想定することができない。この部分に、記号行為としてのことばの発信・受信と、風水景

12) 前掲書(11)、p. 76。

13) 池上嘉彦(1983):ことばの意味と意味作用。池上嘉彦・山中桂一・唐須教光共著『文化記号論への招待—ことばのコードと文化のコード—』、有斐閣、p. 9。



第1図 ことばによるコミュニケーション・モデル

池上嘉彦・山中桂一・唐須教光共著『文化記号論への招待—ことばのコードと文化のコード—』、有斐閣、p. 9より転載。

観における記号の発信・受信との根本的な違いがある。この問題を克服する手がかりを示唆するのが「記号人間」の考え方である。この発想を用いて「ことば」から「ことばらしいもの」にまで記号論の適用範囲を拡大する観点を打ち出したものが文化記号論である。佐藤（1977）は、「記号人間」という概念を提起して、人間の認識の基本的性格を次のように説明している。

「私たちはつねに、手さぐりで、意味を読み取りながら生きている。まずは目に見え耳に聞こえる材料（現象あるいは記号表現）をたよりに、目に見えぬものや耳に聞こえないもの（真相あるいは意味）を推定する（中略）。私を取り巻いているたいていのもの、少なくとも私にとって意味をもつものはすべて記号なのだ。」<sup>14)</sup>

この見解は、人間の認識が本質的に視覚と聴覚に大きく依存するものであり、目と耳の感覚器官を駆使して受信した広義の記号表現を解釈することによって、身の周りの環境を認識するものであると見なす記号論的な世界観の表明である。家族、学校、地域社会等のあらゆる社会生活の中で、顔の表情や態度、些細なしぐさにいたるまで全ての立ち居振る舞いから、人間は意味を読み取り、状況判断を行なって適切な行動を選択している。

このような社会生活では、当人がコミュニケーションを意図しないのにもかかわらず、衣服・髪型・しぐさ・表情を観察した相手が、発信されない意味まで受信してしまう現象が起り得る。これは、生活経験を通して形成された文化的コードを使って、相手の人物像を推定する行為である。このほかにも、オフィスを訪れた人物が、室内のレイアウトと家具・調度品を文化的なコードに照らして解釈し、これから面会する人物の社会的地位や権威を推定することがある。これらの事例は、受信者が周囲の環境を自前の文化的なコードに照合して意味づけを行なう文化的な記号行為であるとともに、「ことば」から「ことばらしいもの」にまで記号論の適用範囲を拡張する行為である。

社会生活における環境認識の形式を記号論の観点から捉えると、最も原初的な環境認識の在り方は、あらゆる事物と人物から記号表現を受信し、解釈することであるといえよう。社会生活では、記号論的な環境認識が重要な役割を果たしているのである。社会生活の中の記号行為は、日常生活の中では意識的に行なう性質のもの

14) 佐藤信夫（1977）：『記号人間—伝達の技術—』、大修館書店、pp. 7-9.

でないために、従来の研究では風水を扱う地理学習と関連づけて論じられることはなかった。この点に、本稿が地理学習に記号論的な環境認識の考え方を導入するねらいがある。

わずかに三澤 (1950)<sup>15)</sup>が「風土の表現体」という概念を提案して、長野県伊那地方の気候環境の特色を考察させる模式的教材の在り方を論じただけである。そこでは、学習対象地域の卓越風を巧みに利用して養蚕業で成果をあげた農家の立地と育成技術、及び偏形樹が重要な指標になることを指摘しただけである。自然的条件を重視した三澤に対して、社会的条件を重視したのが和辻 (1935) である。和辻は、「風土における人間の自己了解の表現」という概念を提起して、その骨子を次のように説明した。

「たとえば着物、火鉢、炭焼き、家、花見、花の名所、堤防、排水路、風に対する家の構造、というごときものは、もとより我々自身の自由により我々自身が作り出したものである。しかし我々はそれを暑さや炎暑や湿気というごとき風土の諸現象とかかわることなく作り出したのではない。我々は風土において我々自身を見、その自己了解において我々自身の自由なる形成に向かったのである。(中略) 我々は先祖以来の永い間の了解の堆積を我々のものとしているのである。(中略) 家を作る仕方の固定は、風土における人間の自己了解の表現にほかならぬであろう。(中略) 我々はさらに風土の現象を文芸、美術、宗教、風習等あらゆる人間生活の表現のうちに見いだすことができる。風土が人間の自己了解の仕方である限りそれは当然のことであろう。我々は風土の現象をかかえるものとして捕える。」<sup>16)</sup>

三澤の「風土の表現体」の概念と、和辻の「風土における人間の自己了解の表現」の概念は、学習対象地域に卓越する建築様式や農業技術等の文化的事象と、卓越風によって形成された偏形樹等の表現体に織り込まれた意味を解釈する観点をもつところに共通点がある。そこには、受信者が周囲の環境を自前の文化的なコードに照合して意味づけを行なう文化的な記号行為を確認することができる。このことは、三澤のような地理教師が「風土の表現体」となる事象の教育的価値を解釈するプロセスにも、「ことばらしいもの」にまで記号論の適用範囲を拡張する作業が含まれていることを示している。以上の検討から、本稿では風水を記号論的な環境認識の装置として捉える。それではこの観点から、風水モデルそのものが備えている記号論的環境認識の特性について考察を進める。

## (2) 風水モデルにおける記号論的環境認識の特性

本稿では沖縄県小浜島の景観の基礎が、1771 (明和 8) 年に発生した明和大津波以降に琉球王府が中国福建省から導入した風水によって形成されたと見る立場をとる。学習者は、小浜島の景観の特色を風水のコードに照合して解釈を加える作業を通して、はじめて眼の前に広がる景観に風水的秩序が生きていることを発見するこ

15) 三澤勝衛 (1950) : 『新地理教育—社会科指導実践のために—』、古今書院、pp. 6-48.

16) 和辻哲郎 (1935) : 『風土—人間学的考察—』、岩波書店、pp. 12-13.



とが可能となるであろう。

小浜島の景観の構成要素となる事象が占める場所・方位・分布状態の意味を把握した学習者は、小浜島の景観が風水モデルを原則として形成された世界観を具象化したものであるという認識に到達することができる。前述した風水カルチュア・ショックは、このことを示唆している。そのような風水カルチュア・ショックを学習者に体験させることをねらう学習は、①沖縄地方の文化の来歴、②中国福建省から導入された風水が沖縄地方に特有な自然的条件と社会的条件の作用を受けて独自に進化した文化の伝播と変容、③リゾート開発に伴う住民の文化的相克、等への発展を展望することができる。このような学習は、単に奇をてらうだけの学習ではない。

人文地理学の村落景観の研究に記号論の分析手法を導入する研究を進めてきた今里(2006)は、次のような論理づけによって風水に言及している。

「各景観要素が、もし全体として何らかの意味上のまとまりを持つのであれば、我々の眼前に広がる村落景観全体は、一步進んで、『テキスト』とみなされ得るだろう。テキストとは、(中略)元来は、文学作品をはじめとする、あるまとまりを持った文章のことを指したが、その概念が世の中のさまざまな文化事象に適用されると、その事象があたかも文章や言葉のように何らかの(時には隠された)メッセージや意味を語る、あるいは文章や言葉と似たような性質をもつ、とみなされることになる。ある村落の宅地周囲の丘陵がそれぞれ4つの神獣を表し、全体として風水思想の世界観を体現している場合などは、まさにそのようなテキストの典型であろう。このテキスト論の視角は、観察可能な現象の深層に、直接には目に見えない何らかの秩序もすなわち『構造』を見出そうとする、構造主義とも密接に関わる。」<sup>17)</sup>

この見解は、「ことば」から「ことばらしいもの」にまで記号論の適用範囲を拡張するとともに、地理学研究の観点から本稿の立場に1つの根拠を与えるものである。今里が指摘したように、「風水思想の世界観」は「観察可能な現象の深層に、直接には目に見えない何らかの秩序」を見出そうとするものである。このような世界観を具象化する文化とこれを保存してきた地域について、①文化的地域の広がり地域差の検討、②文化の伝播と変容の検討、③文化の意義とその時代性の検討を行なう学習は、風水以外に地域素材を求めることは難しいといえよう。では沖縄地方の風水モデルの原型と見なされてきた中国風水モデルは、記号論の観点から捉えるとき、記号論的な環境認識の装置として、どのような特質を備えているのだろうか。

第2図は、中国風水モデルが説明する理想的な環境である「局」を示したものである。ここで、局を構成する主要な要素を概観してみよう。風水では、チベット高原にあるとされる崑崙山から発した大地のエネルギーである生気の流れ道を龍に例えて、これを龍脈と呼んできた。ある土地が局であるか否かを診断する第1の

17) 今里悟之(2006):『農山漁村の〈空間分類〉—景観の秩序を読む—』、京都大学学術出版会、pp. 4-5.



第2図 中国の風水モデルにおける理想的環境

渡邊欣雄 (1990) : 『風水思想と東アジア』、人文書院、p. 28 より転載。

手がかりは、眼に見えない生気を運んでくる山並みである。これに相当するのが、第2図の「祖宗山」「主山」である。祖宗山と主山は、龍脈を呼び込む役割を果たすことから「来龍」<sup>18)</sup>と呼ばれることもある。

北から運ばれてきた生気は、いったん「穴」に蓄えられる。気のエネルギーが集積する理想的な穴の場所を維持するためには、生気が発散してしまわないように防護する手立てが必要になる。郭璞 (276~324年) の著作で、風水診断の技術を体系化した古典として知られる『葬書』では、生気の性質を次のように説明している。

「埋葬は氣に乗ずることである。(中略) 氣は風に乗れば散り、水によって地表を区切られるとそこに止まる。だから古人は氣を集めて散らさないようにし、逃げ去ろうとすれば止めようとした。故に風水と呼ぶのだ。風水の法は水を得ることを最重要とし、風から隠しこむことがそれに次ぐ。(中略) 龍脈の地勢が、数多の馬が天から下ってくるようなら、その龍脈に依って埋葬を行うと、故人の子孫は王者となる。『砂』の地形が乱れた衣服のようなら、それに囲まれた空間に埋葬すると、故人の子孫は嫉妬深い娘 (中略) になる。」<sup>19)</sup>

引用部分から、風水診断の原点は埋葬地の選定であったことが解る。現世に生きる人間が安寧に生活するためには、先祖を風水の理想地に埋葬する必要があると説いている。氣は風によって拡散させられてしまうことから、穴のような氣の集積地を風から防護して隠し込む必要がある。そこで風水モデルでは、穴の左右すなわち

18) 荒俣宏 (1994) : 『風水先生—地相占術の驚異—』、集英社、p. 118.

19) 水口拓寿 (2003) : 『葬書』—風水理論の古典—、アジア遊学、第47号、pp. 21-23.

東西方向に防護の山が分布する場所が吉相地だと見なされている。穴の東西に位置する山は、「砂」と呼ばれる。東側の砂は東を守護する神獣にちなんで「青龍」と呼ばれ、西側の砂は西の神獣にちなんで「白虎」と呼ばれる。

残る問題は、穴の南側の防護である。第2図の風水モデルは、穴の北・東・西の3方向が山で防護されているが、南側に開いた馬蹄形の地形環境を示している。このままでは、穴に溜め込まれた気が南側から流出してしまう。そこで南側を防護するために、穴の南に河川・池・湖・海などの水をたたえる場所を選んで、『葬書』の記述にあるように水の力を借りて気の流出を防ぐのである。第2図の「案山」「朝山」は、穴の南を二重・三重に防護する砂である。

中国では少なくとも郭璞が『葬書』を著して風水理論を体系づけてから現代まで、風水モデルを活用して理想的な土地を求め、穴の場所に墓を建立し、穴の南側の平坦な場所である「明堂」（第2図）に都市・集落・住宅を建設して、自然災害や疫病などから生活を守る文化が連綿と継承されてきた。

以上で検討した風水モデルは、中国の伝統的な環境観と見なすことができる。風水モデルの構成要素は、1つ1つに名称が与えられ、「気を導く」「気を集積する」「気の拡散を防ぐ」等の役割を担う場所として、風水の文化的コードによって意味づけがなされている。そのような場所は、風水の文化的コードを共有する人々にとって、全体として「集積した気を拡散させないように防護する」機能を果たすように統一され、1つの纏まりを示す地域として認識される。風水の文化的コードを持たない人々には、地形環境の分布状態に基づいて選定された墓所や集落の配置と方位の意味を推定し、そのうえで全体が1つの意味的な纏まりをもつテキストとして秩序づけられていることに気付くことは難しいであろう。

風水モデルは、人間が気のエネルギーを巧みに取り込むことで生活の安寧と繁栄を図る前近代的な民俗的環境診断の思想と技術を、大地を記号化することによって組み立てたものである。この意味において、風水は眼に見えない「気の集積と防護」に目的を特化した記号論的環境認識である。風水の文化的コードを共有すれば、眼に見える事象を手がかりにして、眼に見えない気を巧みに取り込んで利用しようとする住民の営みや、邪気・悪気の進入を防いで家や集落を守る営みが、しだいに見えるようになってくる。すると学習者には、眼の前の景観の相貌が一変するよう感じられるだろう。では、風水景観を解釈する場合に、風水の文化的コードをどのように活用し、どのような事象に手がかりを求めればよいのだろうか。

### (3) 風水景観の秩序を解釈する視角

#### 1) 記号論研究者による都市研究の視角—「切り分けと命名」の限界—

前田（1981）<sup>20)</sup>の指摘によれば、記号論の立場から都市を分析する作業の特質は、次の2点にある。第1に、「都市は様々なメッセージを発信する発信者である」と捉えることである。第2に、都市を人間によって生きられた1つのテキストとし

20) 前田愛（1981）：都市を解説する。山口昌男監修『説き語り記号論』、日本ブリタニカ、pp. 331-360.

て捉え、そこに隠されているメッセージと、表面に浮上しているメッセージを解説することである。

この2つの指摘は、人間の社会生活を取り巻く様々な文化的事象は何かを意味する記号として捉えることができるという広義の記号論の表明である。人間は多種多様な記号に取り囲まれており、それらを記号として解釈しながら生活しているという記号論的な世界観の表明でもある。前田は、このような立場から東京の新宿を事例地域にして、都市を構成する5つの要素を抽出し、これを指標にして新宿の都市イメージを考察する研究を行なった。ここで検討された5つの指標とは、「パス」「エッジ」「ディストリクト」「ノード」「ランドマーク」である。

「パス」は、特定の場所と場所を結びつける道路・鉄道・運河等を指している。「エッジ」は、ある地域の境界線をなすもので、海岸線・壁・鉄道の高架線等である。「ディストリクト」は、都市内部においてある纏まりをもった地域のことで、「〇〇界限」と表現される地域を指している。「ノード」は、ディストリクトの焦点になる場所で、交差点が代表的事例である。「ランドマーク」は、都市内部で人目を惹く塔・モニュメント・看板等の建造物を指している。

前田が行なった都市の記号論による分析は、①都市を5つの要素によって切り分ける作業、②切り分けた都市の要素を分類して分布状態を把握する作業、③分類した都市の要素を再度結合させて都市を解説する作業、という3段階の方法をとったところに特色がある。この手法の発想は、区切れ目が不明瞭で混沌とした地表面を記号化して、適切な単位に切り分ける第1段階、次に切り分けた単位に名前を与えることで他と区別して認識できるようにする第2段階、切り分けて命名した各単位を再度つなぎ合わせることで一種の記号的秩序を確立して、そのうえで現実を秩序立てて認識しようとする第3段階、の3つの手続きをふむ言語学の記号体系の考え方に基づいている。

言語学の記号体系における「秩序」とは、「何の分節状態をも示さぬ混然たる現実に、分節的な記号群を割りつけ、押しつけることによって現実に切り分けをほどこす」ことで、「何かをそれ自身として指名すること、すなわち事物の自己同一性を設定すること」である<sup>21)</sup>。このような論理に基づく従来の記号論研究者による都市研究の視角は、対象を認識しやすいように「切り分け」「命名」する作業を通して、「秩序」を明らかにすることに主眼をおくものであったといえよう。

## 2) 風水景観を分析する視角—「切り分け」から「統合」の論理へ—

ところが風水景観は、「切り分け」と「命名」の操作だけでは十分に捉えることは難しい。風水景観は、龍脈が運んできた生気を集積し防護する目的のために、環境条件を診断し整備することに努めてきた住民の営みが景観に刻印されたものである。このため風水景観における「秩序」は、「切り分け」と「命名」による還元主義的な環境認識とは反対の、景観の構成要素となる事象が「生気の集積と防護」の機能を果たすために統合される性質のベクトルをもっているのである。風水景観を

21) 前掲書(14)、pp. 54-55.

解釈するためには、「切り分けの論理」よりも「統合の論理」が重要なのである。

加えて記号論研究者は、現実には生起する都市の実態そのものから学ぶのではなく、都市について書かれた文章と文学作品に分析の素材を求める立場をとってきた。このことは、分析対象となる資料の著者の認識に制約を受けることになる。この部分に、従来の記号論研究の1つの限界がある。そこで本稿は、言語学における記号体系の「秩序」とは異なる「秩序」の捉え方の枠組みに着目する。

地理学における実質地域の概念の1つである「統一地域」(「結節地域」「機能地域」ともいう)が説明する「秩序」の在り方が、従来の記号論研究の限界を克服するうえで重要である。統一地域とは、「機能的に関連し合っている部分空間が全体としての組織や一体性をもつ」<sup>22)</sup>地域のことである。中国の伝統的な風水モデルは、生気を集積し防護する機能を果たすために関連し合っている地形環境が全体として一体性を示すとともに、秩序づけられていることから、統一地域の1つと見なすことができる。風水景観を秩序立て、景観の部分的構成要素を統合して纏まりある全体空間を形成するための論理に迫るためには、「切り分け」と「命名」に加えて、「統合」の論理を明らかにすることが必要である。では以上で検討した観点から、現地調査をふまえた風水景観の秩序の問題について考察を進める。

#### 4. 沖縄県小浜島の風水景観—島嶼地域の風水—

##### (1) 全島スケールの風水景観—生気を集積・防護する景観秩序—

###### 1) 集落立地の景観秩序

沖縄県の八重山列島に属する島は、地形環境と農業経営の状態によって「タンゲン島」(田国島)と「ヌンゲン島」(野国島)に分類されてきた。タンゲン島とは「山があって、そこから流れ出る水を利用して田を開くことのできる島」のことであり、ヌンゲン島とは「山も川もない平らな島で、水田はまったくみられないか、あってもわずかに天水田がある島」のことである<sup>23)</sup>。

小浜島は、タンゲン島に分類されてきた。本稿では小浜島の村内集落が誕生するきっかけは、1771(明和8)年に八重山一帯を襲った地震津波による災害であったという立場をとる。村内集落の起源は、伝承によれば海岸低地の湧水地点にあった2つの集落と、大岳と村内集落の間にあったとされる1つの集落を小浜目差加武多という役人が1つにまとめたことによると考えられている<sup>24)</sup>。この伝承は、琉球王府が島々に風水師を派遣して風水診断を実施し、吉相の場所に地震津波に罹災した集落をまるごと移転させた村籍移動を今日に伝えるものである。海岸低地に位置していた集落の耕地が、明和と津波に罹災した状況について、牧野(1968)は次の

22) 西川治(1998):均等地域と統一地域. 奥村薫・関根清他編『CD-ROM 世界大百科(第2版)』、日立デジタル平凡社。

23) 松村正治(2002):竹富島と小浜島の比較環境史—町並み保存運動とリゾート誘致への序曲—。松井健編『開発と環境の文化学—沖縄地域社会変動の諸契機—』、榕樹書林、pp. 118-119。

24) 大城直樹(1990):亜熱帯島嶼の集落立地と生活様式—八重山群島・小浜島—。人文地理、第42巻第3号、pp. 31-32。



ように指摘した。

「小浜部落の東方二軒くらいのところに、ネーマスという地名があり、その海岸の水田地帯は現在ナーンダと呼ばれている。水田は（中略）細長い小高い土地で両分されており、その小高いところに道がある。（中略）小浜村の前本という人がその道に立っていると、東の遠くの沖から大きな波がおしよせて来たのでうちおどろき、ヤコリンダーという一本松のある高地まで逃げてホッと息をつき、後方を振り返って見た。ところがおどろいたことに、自分がさきほどまで立っていた水田地帯は、すでに冠水されて満々たる大海となっており、沖から更に大きな波のウネリが寄せて来た。（中略）『ナン』とは津波という八重山の古い言葉であるから『ナーンダ』とは『津波の田』ということになる。」<sup>25)</sup>

小浜島の東方に位置する石垣島では、海拔 40m 以下の場所が津波のために冠水し、宮良台地の牧中では海拔 85.4m の地点まで津波が到達したことが報告されている<sup>26)</sup>。明和地震の震源地が石垣島の南南東約 40km の地点であったことから、小浜島の被害は石垣島・竹富島・黒島・新城島の島陰に位置している条件と、周辺の海域に珊瑚礁が発達している条件から海岸低地が冠水するにとどまった。このことから推定すると、小浜島の東海岸では海拔 15m 以下の地点が津波被害を受けたと考えられる。琉球王府は、津波被害を受けた集落を村ぐるみ安全な場所に移動させることで、風水診断による防災対策を講じたのである。

村籍移動によって誕生した村内集落は、小規模であっても碁盤目状の区画と道路網を特徴とする町並みを整えていった。この「碁盤型集落」の景観が風水に基づいていることを、渡邊（1990）は次のように説明している。

「生気に満ちあふれた地が発見できると、生気の集中したツボ、すなわち『穴』の前の空間を『明堂』と称して、ここに造形空間が確保される。（中略）漢族の識者たちは古来から、天は円形をなし地は方形をなすと考えてきた。陰陽相反するものが交合して世界の動態と調和・均衡がえられるわけだが、（中略）天円と地方とは宇宙を二分する。（中略）天はすべて円周運動に帰一するが、地は際限なく方形状に細分されていく特性をもつものと判断されている。（中略）風水思想の発展は、『天円地方』説を吸収して、都城・村邑・住宅・墳墓などのあらゆる造営物の基本判断に採用されることになる。」<sup>27)</sup>

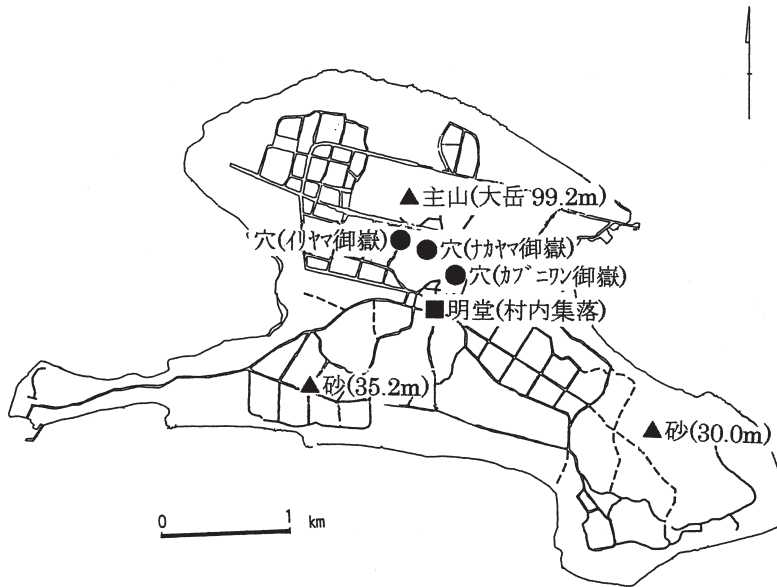
この指摘から「碁盤型集落」の景観をなす村内集落は、風水の考え方を導入して形成されたと見なすことができる。では村内集落の場所は、どのような村落風水の診断に基づいて決定されたのであろうか。村内集落には風水書が残されていないため、ここでは中国風水モデル（第2図）に照らして、村内集落を津波から守るための風水モデルの解釈を試みる。

第3図は、中国の風水モデルから類推した暫定的な村内集落の風水モデルである。生気を呼び込む主山にあたるのが海拔 99.2m のウフタキ（大岳）である。生

25) 牧野清（1968）：『八重山の天津波』、私家版（自費出版）、p. 167.

26) 前掲書（25）に掲載されている「明和津波の石垣島内侵入状況推定図」による。

27) 渡邊欣雄（1990）：『風水思想と東アジア』、人文書院、pp. 31-32.



第3図 村内集落の村落風水モデル

気が集積する最も重要な場所である穴には、東側から順に「カブニワン御嶽」（別名は東山御嶽）、「ナカヤマ御嶽」（仲山御嶽）、「イリヤマ御嶽」（西山御嶽）の3つ聖地が分布している。

小浜島では、どの御嶽にも住民によって聖地として認知されるきっかけとなった伝承が保存されている。カブニワン御嶽は、住民の先祖にあたる女性が死後に靈魂の姿でたち現れ、住民を畏怖させたことに由来する。ナカヤマ御嶽は、神司を務めた男性が死の間際に、「小浜の人々には真水を与えたまえ」と言い残した言葉が現実となったことから、人神として祀られたことに由来する。イリヤマ御嶽は、フナーという名の人物が村内集落の南側に広がる海岸低地で、神の火が現れたのを発見して、これを畏怖して信仰するようになったことに由来する。

3つの御嶽に共通する条件は、住民の先祖が特殊能力を発揮したことが畏怖の対象となり、その舞台となった場所が聖地として認知されるようになったことである。中国の風水モデルは、穴を墓所とすることが原則である。小浜島の風水モデルは、一般的な住民の墓所でなく、特殊能力を発揮した祖先神を祀ることを原則にしているところに1つの特徴がある。この部分に中国福建省から伝えられた風水モデルが、小浜島で独自の祖先神を信仰する文化と結び付くことで、独自の変化を遂げたことを確認することができる。では、現世に生きる住民の住処は、どのようなになっているのだろうか。

中国の風水モデルは原則として、穴を先祖の住まいである墓所とし、穴の南側に位置する平坦な場所を明堂と呼んで、現世に生きる者の住まいにしてきた。小浜島でも村内集落は、明堂に相当する位置を占拠している。小浜島の代表的な民謡として知られる「小浜節」は、歌詞の1番の中で島の景観の特質を次のように捉えて

いる。

「だんちよていゆまりる くもうまているすまや うふだきばくしゃてい  
しるはままいなし (訳/世間で名高い 小浜という島は ウフタキを背後の守  
りである腰当にして 白浜を前にしている)」<sup>28)</sup>

歌詞の中で登場する「くしゃてい (腰当)」は、「幼児が親の膝に坐っている状態とおなじく、村落民が御嶽の神に抱かれ、膝に坐って腰を当て、何等の不安の感ぜずに安心しきって拠りかかっている状態」<sup>29)</sup>を指す概念である。集落の背後に位置するウフタキは、住民にとって鎮守の神である。このような地形環境と集落の関係性の捉え方は、中国の風水モデルによる場所の意味づけとは明らかに異なっている。「腰当」は、風水モデルで示された生気を集積し防護する主山や砂のような山が果たす機能について、住民が独自の解釈を加えたことによって形成された日本独自の風水の概念である。小浜節には、住民の風水景観に対する環境認識が刻み込まれている。

風水モデルの主山の役割を担うウフタキが導き入れた生気は、御嶽が分布する穴と、村内集落が立地する明堂に集積する。ところが生気は、防護の手段をとらなければ風に流されて散逸してしまう。この防護の役割を果たすのが、穴及び明堂の東西に位置する砂とよばれる山である。村内集落の場合、地形環境の起伏の状態と、植生の分布状態から判断すると、東の砂はヤマハリゾート「はいむるぶし」の敷地に取り込まれた海拔 30.0m の丘陵地であり、西の砂は村内集落の中心部の南西に位置する海拔 35.2m の海岸段丘の地形面である。ところが小浜島の地形環境は、東西の砂に相当する山が穴に集積した生気を風から防護するのに十分な規模ではない。

また小浜島では墓所として利用することが理想的な穴は、先祖神を祀る御嶽の聖地にあてられてきた歴史的経緯がある。住民の墓所は、穴でない場所に求めなければならぬ。東西方向が約 5km、南北方向が約 2km の小浜島では、土地の制約から、住民が穴の場所に十分な墓所を確保することは難しい。小浜島の地形環境は、十分な砂を備えておらず、中国の風水モデルのような理想的条件を充たしていないのである。

こうした地形環境の条件を補完するために、小浜島では独自の生気の防護手段が発達した。では、砂の山並みを補完する墓所の在り方とは、どのようなものであろうか。また小浜島の墓所は、どのような原則に基づいて風水景観の秩序に組み入れられてきたのであろうか。ここでは、伝統的な墓の構造と分布状態に着目して考察を進める。

## 2) 墓の構造と分布状態における景観秩序

小浜島では、風葬して処置した遺骨を 7 年忌に洗骨して亀甲型の私有墓に安置して祀る習俗が 1970 年代まで保存されてきた<sup>30)</sup>。住民は、私有地に「門中 (ムン

28) 山城浩 (1972) : 『小浜島誌』、小浜島郷友、p. 497.

29) 仲松弥秀 (1975) : 『神と村』、伝統と現代社、pp. 15-16.

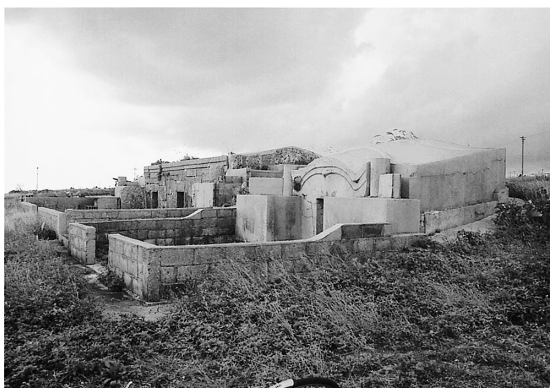


写真1 小浜島の亀甲墓と破風墓 (2005年12月撮影)



写真2 亀甲墓を簡素化した新型の墓 (2005年12月撮影)

チュー)」と呼ばれる父系の親族集団を単位にして、屋根の部分の平面形が亀の甲羅によく似た形状の共同墓を建てて先祖を祀ってきた。

写真1は、小浜島に卓越する亀甲墓（カーミンクーパーカ）と、それに隣接して建てられた破風墓（ファーフォーバカ）である。間口が約5m、奥行きが約10mの区画に、庭（ミナガ）と呼ばれる前庭のような場所があり、その奥に風葬した遺骨を納めた亀甲墓が建てられている。この形式の墓は、与論島の周辺地域が分布地域の北限であり、南限は台湾及び中国福建省である<sup>30)</sup>。

筆者が現地調査を行なった2005（平成17）年12月の時点で、写真2のように、亀甲墓の亀の甲羅状の屋根部分の特色を残しながら簡素化されたデザインの新型の墓が新造されるようになっていた。この新型の墓の形態は、伝統的な亀甲墓と破風墓の特色を簡素化して融合させたものである。

小浜島に分布する亀甲墓のうち、伝統的な墓の構造を今日に伝える事例を示したのが写真3及び写真4である。写真3は、亀甲墓を正面が捉えたものである。暴

30) 前掲書 (28)、pp. 152-160.

31) 名嘉真宜勝 (1999)：『沖縄の人生儀礼と墓』、沖縄文化社、pp. 66-67.





写真3 小浜島の亀甲墓と福木 (2005年12月撮影)

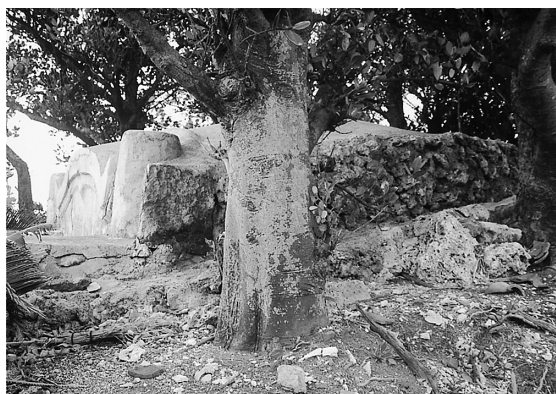


写真4 福木に防護された亀甲墓 (2005年12月撮影)

風によく耐えることから、沖縄地方では生垣と街路樹に利用される福木が、墓を守る防風林のように植えられている。近づいて観察すると、幹の直径が約30cmの福木が、墓の前面を除く側面と後方に植えられている。加えて特に写真4から確認できることが2つある。第1に、墓の前面を除く3方位が福木に囲まれていることである。第2に側面の状態から、この墓が珊瑚礁をくみ上げて建造され、後年にコンクリートと漆喰で表面を塗り固めることで補強と修復が行なわれた痕跡を確認できることである。このことは写真3及び写真4の墓が、写真1のコンクリート製の墓よりも建造年代が古いことを示している。古い墓には建造の年代を示す手がかりが刻まれておらず、資料の制約もある事情から、墓が建てられた年代については十分に検討できなかった。

このように小浜島の亀甲墓は、その材質と修復及び補修の痕跡に着目すると、珊瑚礁をくみ上げて建てたものが現存する墓の中では最も古い。このことから少なくとも写真3及び写真4の墓と、この墓と同じ構造をもつ写真1のような形式の墓が、小浜島の伝統的な墓地の景観を形成してきたといえよう。

ここで写真3、写真4及び写真1を手がかりにして、小浜島の亀甲墓の構造の特



徴を検討してみよう。現存する亀甲墓のうち最も古い形態を留めていると考えられる写真3及び写真4の墓は、正面を除く3方位を福木で囲まれている。この様子は、主山のウフタキが村内集落に生気を導き入れ、砂の山が集積した生気が散逸しないように防護する風水モデルと相似の関係にある。また、墓の正面にある墓の庭（ハカヌナー）は、墓の本体から人間の腕のように伸びる袖垣（スディガチ）によって、門（イリゾー）以外の部分が囲まれている。墓の庭は子孫が墓参のときに祈りを捧げ、宴が行なわれる場所である。この場所を訪れた子孫を、先祖が腕で抱えて守るように見立てることのできる墓の構造は、小浜節の歌詞にあった「腰当」の概念と同質のものである。ここにも、相似の関係を確認することができる。

小浜島の亀甲墓は、中国の風水モデルを微細な墓の構造にも適用して建造されたものである。小浜島では風水モデルが、村内集落の場所の選定と、都市計画の基本プランだけでなく、微細な1つの墓の構造にも一貫して採用されてきたのである。小浜島では、先祖の住処と子孫の住処が同じ風水の論理で相似の関係が成立するようにデザインされてきたのである。本稿では、便宜的に村内集落の立地を決定する際に、小浜島の全島規模の地形環境の診断を行なう風水モデルを以下では「村落風水」と呼ぶ。また、1つの墓の構造に風水モデルの考え方を適用する微細な風水モデルを、以下では「墓地風水」と呼ぶことにする。

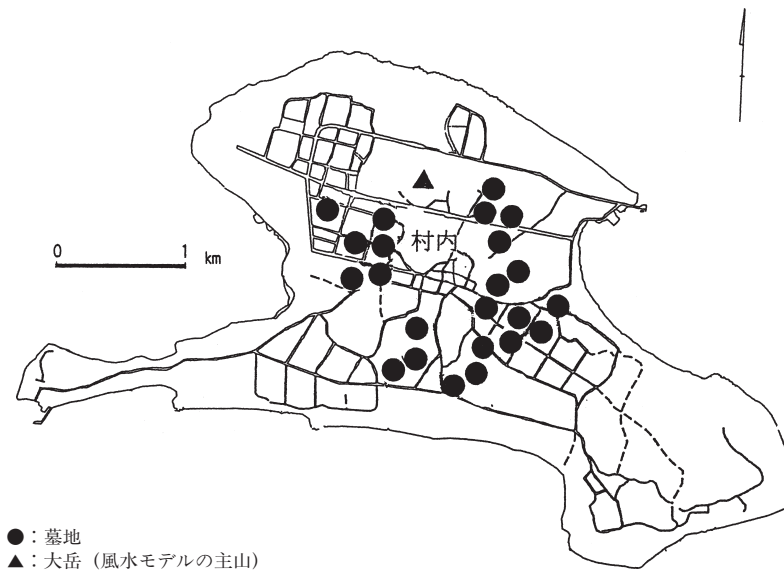
ここで視点を変えて、墓地風水を分布論から捉え直してみる。墓の分布を1つのグループとして取り扱おうと、小浜島の村落風水の景観と墓地風水の景観の関係は、どのように解釈できるのであろうか。

第4図は、小浜島に現存する墓の分布状態を示したものである。小浜島の墓地は、村内集落の周囲の耕地の中に分散して建てられている<sup>32)</sup>。現地調査では、23の墓地を確認することができた。伝統的な亀甲墓が1基建てられ、それに隣接して新型の墓が1基または2基建てられている墓地が卓越している。村内集落の南東に位置する新型の墓だけからなる墓地では、最大で5基の墓が横一列に並ぶ事例を確認することができた。

亀甲墓が主流となっている小浜島の墓地群の分布状態で特徴的であるのは、数基ずつ分散立地する墓地群は全体として、村内集落の周囲を取り囲むように配置されているところである。先に指摘しておいたように、小浜島の地形環境を第2図に示した中国の風水モデルに照らして診断すると、主山であるウフタキ（大岳）が導き入れた生気を防護する砂の山並みの起伏の状態が十分ではなかった。この状態を風水術により改善して理想的環境に近づけるためには、不足する砂を人工的に補完する必要がある。補完の対策を施さなければ、村内集落の場所に集積した生気が風によって散逸してしまうからである。そこで編み出されたのが、風水モデルの縮図として、生気が集積する条件を整えた墓を集落の周囲に配置することで、人工的な砂の山並みを補完する方法であった。

写真3及び写真4で示した亀甲墓は、風水モデルが表す理想地の縮図といえる

32) 大城直樹 (1990)：亜熱帯島嶼の集落立地と生活様式—八重山群島・小浜島—。人文地理、第42巻第3号、pp. 26-44。



第4図 小浜島における墓地の分布状態

条件を備えている。そのような墓は、福木によって生気が防護された微細な穴と見なすことができる。微細であっても生気の集積する墓地群で集落を囲む方法は、植林以外の方法で砂の山並みを補完するための最も現実的で実行可能な手段である。このような観点から墓地群を捉えると、小浜島の墓地風水の景観は、小浜島型の風水モデルを完成するための風水術が大地に刻印されたものと解釈することができる。小浜島では、1基の墓地のデザインと構造にも、また墓地群の配置と分布状態にも、村内集落に集積した生気を防護する意味づけがなされている。小浜島の墓と墓地群は、風水モデルを完成して島を地震津波から守るうえで重要な役割を果たしているのである。

ところが村内集落の南東部に分布する墓地群に限っては、沖縄地方の他の島々で墓地の建立についてタブーとされている原則が、タブーと見なされていない稀な事象を確認することができる。それは、墓の方位の問題である。沖縄地方の墓地風水には、①墓口は南から少しずらすこと、②墓口は東・北東・北西に向けてはいけないこと、③墓口を御嶽に向けてはならないこと等の原則がある<sup>33)</sup>。しかし村内集落の南東部に分布する墓は、これらの原則に反して建てられている。

村内集落の南東部の一帯に分布する19基の墓について、墓口の方位を測定したところ、真東の方位から南へ $5^{\circ}$ から $65^{\circ}$ の範囲で、墓口をずらして墓が建てられていた。このような方位をとる墓の建て方は、墓口を南から少しずらす原則と、墓口を東に向けてはならない原則に反している。加えて19基の墓が向いている方位の範囲には、アールムテワン御嶽とカンダカー御嶽が位置している。この2つの御嶽は、ヤマハリゾート「はいむるぶし」の敷地の中に取り込まれたとはいえ、住

33) 前掲書(31)、p. 74.

民にとって重要な聖地であることに変わりはない。では19基の墓があえてタブーを犯して御嶽のある南東の方位に向けて造られた事情は、どのような風水景観の秩序として解釈できるのであろうか。この問題で重要な手がかりとなるのが、村内集落の北端に鎮座するカブニワン御嶽と、島の東岸に鎮座するアールムテワン御嶽を結ぶ「神道（カンミチ）」の存在である。

### 3) 御嶽と神道の景観秩序

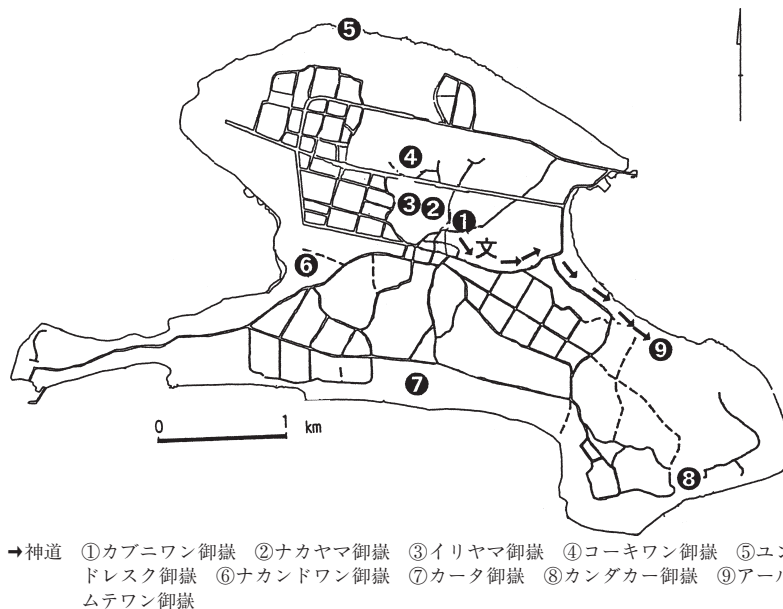
沖縄地方には、人は死ぬと神になり、神となった先祖は家族と子孫を守り、その繁栄を日夜忘れることはないという思想がある<sup>34)</sup>。小浜島の御嶽に鎮座する村内集落の守護神は、特殊能力を発揮した先祖神を祀っているところに特色があった。第5図は、小浜島にある9つの御嶽の位置を示したものである。住民からの聞き取り調査によれば、9つの御嶽には異なる先祖神が鎮座しているわけではない。御嶽が祭祀するのに遠くて不便な場所や、危険な地形環境に位置する場合には、集落の周辺部に勧請して便宜が図られてきた。このような御嶽は、「通し御嶽（トオシウタキ）」と呼ばれて区別されている。土地改良事業によって消滅したとされる10番目のタナカワン御嶽の旧所在地と勧請の有無は、確認することができなかった。

第5図に示した御嶽のうち、カブニワン御嶽は東岸のアールムテワン御嶽から勧請された経緯がある。島の北部の断崖上に位置するユンドレスク御嶽は、はじめにコーキワン御嶽の位置に勧請され、次に現在のイリヤマ御嶽の位置に勧請されて、2度の遷座を経験した。カータ御嶽は、祭祀に不便な場所であることからイリヤマ御嶽に勧請され、合祀されている。このように御嶽の勧請を検討すると、カブニワン御嶽、イリヤマ御嶽、コーキワン御嶽の3つの御嶽が、通し御嶽であることを確認することができる。

このような関係にある御嶽の中で、アールムテワン御嶽と、この神を集落に勧請したカブニワン御嶽を結ぶ経路が神道と呼ばれ、住民に神聖な場所として認知されている。第5図に示した神道の経路は、聞き取り調査に基づいて筆者が復元したものである。神道の出発点は、カブニワン御嶽である。カブニワン御嶽は、旧暦6月に行なわれる島の最大行事である豊年祭と、旧暦8月または9月の結願祭のときに、祈りを捧げ民俗芸能を奉納する神事を中心になる重要な聖地である。神道は、カブニワン御嶽の腰当の森を起点にして、小浜小中学校の敷地を通過し、幹線道路に沿って東に進路をとる。製糖工場の手前にある三叉路で南東に進路を変えた神道は、そのまま進んでヤマハリゾート「はいむるぶし」の敷地の中に進んで、海岸に沿ってアールムテワン御嶽に到達する。神道は更に海上に続いているといわれているが、海上の経路については確認できなかった。

この神道は、豊年祭が近づくと村内集落の老人会が清めの清掃活動を行なうだけでなく、アールムテワン御嶽周辺の一部がリゾート地の敷地に取り込まれても、穢してはならない神聖な神の道として、常に住民が関心をはらう場所となっている。厳しい掟によって口外がタブーとされる秘祭の豊年祭においても、この神道は重要

34) 仲松弥秀 (1977):『古層の村 沖縄民俗文化論』、沖縄タイムス社、p. 41.

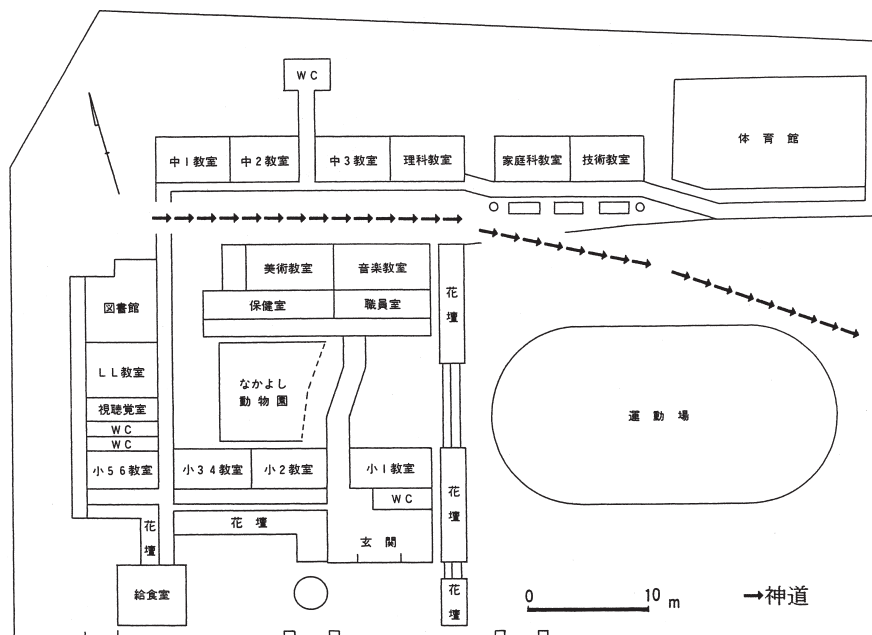


第5図 小浜島の御嶽と神道

な役割を果たす場所と見なされている。この事実を示すエピソードが、小浜小中学校に残されている。

第6図は、小浜小中学校が作成した「校地と校舎配置図」をベースマップにして、そこに神道の経路を示したものである。神道は、図書館と中学校第1学年の教室の間にある渡り廊下の西側に設置してある階段から校地に入る。その後、中学校の校舎と職員室のある校舎の間の中庭を通過し、花壇と理科教室の間に植えられているガジュマルの木を經由して運動場に出た神道は、運動場の東端にある給水タンクの横を通過して、正門前の幹線道路と交わる。小浜小中学校では、1978（昭和53）年10月に体育館が完成し、1980（昭和55）年の3月から5月にかけて、神道の両側に中学校校舎と職員室がある校舎が完成した。この一連の体育館と校舎の新築工事の計画がもちあがったときに、住民から神道が通過する場所を穢したりしないように、また障りがないように配慮することが求められた。2005（平成17）年現在、現地調査で確認した校舎と体育館の配置は、眼に見えない神道の空間を確保するように配慮し、体育館の位置を北へずらして当初の建築計画を変更することで実現した景観であった。

写真5は、中学校第2学年教室と美術室の間の神道の上から、体育館の方向に向かう神道を撮影したものである。聞き取り調査によって、校舎の建築計画が変更された事実を確認することがなければ、芝が植えられた中庭が2つの御嶽を結ぶ神の道であることに気付くことは難しいといえよう。また写真の右側奥の音楽教室と電柱の間に植えられている2本の木が、ガジュマルである。住民はもとより学校関係者の間でも、2本のガジュマルにはキジムナーと呼ばれる妖怪が住んでいる



第6図 小浜小中学校の敷地を通る神道の経路

小浜小中学校の「校地と校舎配置図」を基に作成。



写真5 小浜小中学校の校舎の間を通る神道 (2005年12月撮影)

ため、この木を伐採し、または傷つけると、関係者はタタリにあうと信じられている。御嶽の神事に関わる神人がこの木を見ると、赤い髪をした身長70cmほどの子どもの姿をした妖怪が現れるという目撃談も収集することができた。

では2つの御嶽を結ぶ神道は、中国の風水モデルを手がかりにすると、どのように意味づけをして解釈することができるのであろうか。中国の風水モデルにおける主山と砂の山が、村内集落では「腰当(クサテ)」という概念に転化して意味づけられていることを先に指摘した。小浜島では中国の風水モデルが、御嶽を聖地とする祖先神崇拝と整合性をもつように受容されてきたのである。このような観点か



ら神道を捉えると、生気が集積する穴に鎮座するカブニワン御嶽からアールムテワン御嶽を經由して海上へ続く神道は、主山のウフタキが導き入れた生気が穴と明堂に集積した後、南に開いた地形環境から流下する龍脈と同定することができる。

風水は、龍脈によって運ばれてきた生気を集積・防護して利用する技術の体系であることから、龍脈の生気の流れを遮断しないように生活空間の環境を整備することを重視する。村内集落の人々が穢すことがないように清め、学校の校舎の建築計画をあえて変更することで守ってきた神の道は、風水の龍脈が転化したものである。小浜島では、眼に見えないものための空間を確保し、その力によって地震津波から集落を守ろうとした風水の原則が、景観の構成要素を統合する骨格を成している。村内集落の位置、御嶽の位置、墓の配置と分布状態、神道の経路は、全て生気を集積し防護するための風水の原則によって統合されるとともに意味が付与され、秩序づけられているのである。

小浜島を訪れる学習者が、島の景観を観察して特色を考察するとき、風水の原則について理解する前と後では、眼の前の景観はまったく違ったものに見えるであろう。風水の原則が島内の部分景観を統合し、全体景観に秩序を形成していることに気付くときに体感するカルチュア・ショックこそ、本稿が提案する学習の重要な起点である。ところが小浜島を訪れた学習者が、まず景観の観察を意図して集落内の路地を歩くとき、以上で検討した全島域のスケールで生起する風水景観の原則と秩序よりも、眼にとまりやすく、目新しく珍しいうえ、把握しやすい事象がある。それが、村内集落の集落域のスケールで生起する風水景観である。

## (2) 集落域スケールの風水景観—邪気と亡霊を撃退する景観秩序—

村内集落内部の景観は、赤瓦を漆喰で固定した伝統的な民家の町並みと道路網が碁盤目状に整然と区画されているところに特色がある。このような特色を備えた集落は、碁盤型集落と呼ばれている。

村内集落の景観を徒歩で観察すると、①碁盤目状の道路網、②T字路の突き当たりの民家の塀に設置されている「石敢當」と文字が刻まれた石造物、③民家の門の正面に設置された「マイマークス」と呼ばれる小さな壁、④門柱と屋根に設置されている焼き物のシーサーが、沖縄らしい集落の佇まいと雰囲気を出していることに気がつく。風水モデルの情報を持たない学習者は、①から④までの事象が集落内に数多く分布していることに気づいても、4つの事象の関係性にまで注意を向けることはない。

風水景観を解釈するために必要なコードを持たない学習者にとって、村内集落の景観を特徴づける4種類の部分景観は、4つの個別の事象として認知されるだけである。ところが学習者が住民と同じ風水のコードを共有すると、風水の原則が4種類の部分景観の存在理由と配置に意味を与え、それら部分景観を統合して秩序を生み出し、全体景観を形成していることを解読できるようになる。この論点は、香港風水戦争の事例から類推することができる。学習者は、風水の情報を獲得することで、風水景観を解読するコードという道具を頭の中に組み立てることができるの



写真6 教職員住宅前の石敢當 (2005年12月撮影)



写真7 伝統的な民家のマイマーキス (2005年12月撮影)

である。コードを獲得する前後では、眼の前に広がる同じ景観の相貌が一変するよう  
に感じられるであろう。この点に、風水カルチャー・ショックに着目する学習の  
醍醐味がある。では、まず村内集落を特徴づける部分景観について検討する。

写真6は、小浜小中学校の敷地に隣接する教職員住宅の前に設置されている石  
敢當である。この石敢當は、コンクリート板に文字を書いた自家製のもので、縦  
50cm、横30cmの大きさがある。むしろ集落内のT字路に設置されている石敢當  
の主流は、小型のものである。本州の住宅の玄関で見かける花崗岩を素材にした表  
札型の石敢當が多く、縦20cm、横10cmの大きさのものが玄関の門柱のほか、民  
家を囲むブロック塀と石垣に設置されていた。

小玉 (1999)<sup>35)</sup>の指摘によれば、第1に沖縄地方の石敢當は中国福建省莆田市か

35) 小玉正任 (1999) : 『石敢當』、琉球新報社、pp. 95-103.

ら伝えられた風水の邪気払いと魔除けの石造物である。第2に中国福建省莆田県では、唐の時代の770(大暦5)年に既に民家の入り口や村の入り口等に石敢當を設置する習俗が定着していたことが確認されている。

写真7は、石敢當と同じように邪気・殺気を撃退する魔除けのために、門の正面に設置されたマイマーキスである。この小さな壁は、珊瑚礁や石を使った重厚で堅牢なものもあれば、木材の2本の支柱の間に板をわたしたもの、樹木の生垣の形態をとるもの、の3つのタイプがある。聞き取り調査によれば、マイマーキスには魔除けのほかに、目隠しの機能がある。風水の考え方によって建てられた民家は、玄関を東に造り、門を敷地の南側に造る。このような間取りは、門の前を通る通行人から部屋の中が見えてしまうため、目隠しを施してプライバシーを守る必要がある。

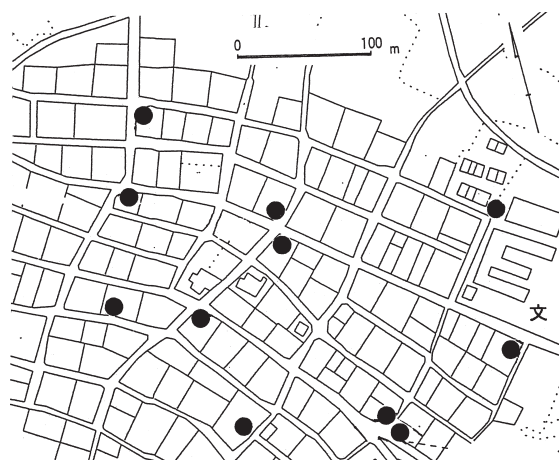
それでは、①碁盤目状の道路網、②T字路の石敢當、③民家のマイマーキスを主要な手がかりにして、3種の部分景観を統合して集落域スケールの風水景観を形成する原則について考察を進める。

第7図は、村内集落のT字路に設置された石敢當の分布を示したものである。村内集落の道路網は、風水の「天円地方」説の考え方を忠実に採用したために碁盤目状になっている。聞き取り調査によれば、毎年お盆の時期になると、海難事故で亡くなった人々の霊が供養を求めて村内集落にやって来る。このような亡霊は、住民の生活に災いをもたらすと考えられてきた。亡霊をはじめ邪気や殺気は、風水では直進することしかできないと考えられている。集落の道路網は碁盤目状であるため、亡霊や邪気を放置すると家にまで侵入されてしまう。そこでT字路の突き当たりには家を構える住民は、亡霊や邪気を撃退する風水の魔除けとして、石敢當を設置している。現地調査では、11基の石敢當を確認することができた。

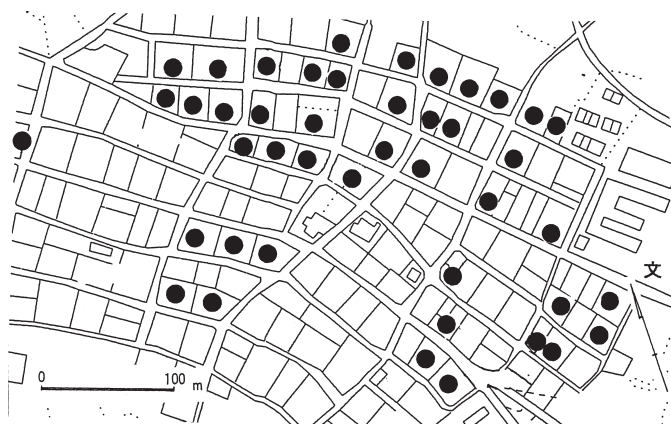
第8図は、村内集落のマイマーキスの分布を示したものである。住民は、伝統的な赤瓦の平屋の民家を新築あるいは増改築して2階建ての鉄筋コンクリート住宅に住み替える場合にも、石敢當と同じ機能をもつ風水装置としてのマイマーキスを設置してきた。現地調査では、44基のマイマーキスを確認することができた。亡霊や邪気・殺気を撃退するには、石敢當を路地や門柱に設置するだけでは十分ではない。集落の路地にまで侵入した亡霊と邪気・殺気を撃退するには、各民家の敷地が路地に向かって開放されている門のすぐ内側の場所にマイマーキスを設置する必要がある。住民は、海側からやってくる亡霊と邪気・殺気を撃退するために、シーサーを設置する習慣を含めると、二重三重の防護対策をとってきたのである。

村内集落の住民は、風水論に忠実に集落をデザインすると碁盤目状の道路網を採用することになる。ところが碁盤型集落は、住民の生活に災いをもたらすと考えられてきた亡霊と邪気・殺気の侵入を、集落の中心部まで許してしまう。そこでT字路に石敢當、門のすぐ内側にはマイマーキス、門柱と屋根にはシーサーを設置して、二重三重の風水の仕掛けを準備して集落を守ってきたのである。

一見すると静かで落ち着いた佇まいにしか見えない町並みの中に、住民は石敢當・マイマーキス・シーサーが絶えず眼に見えない亡霊と邪気・殺気を撃退する景



第7図 村内集落における石敢當の分布



第8図 村内集落におけるマイマークスの分布

観を重ねて観ている。学習者は、住民と同じ風水のコードを獲得してはじめて、眼には見えないはずの景観を重ねて観ることができるようになるのである。集落域スケールの景観は、海から訪れる亡霊と邪気・殺気を撃退する機能によって統合された風水景観なのである。そこには、島嶼地域に適合した風水の地方色がある。それでは、花崗岩からなる起伏の大きい地形環境をもつ内陸盆地の風水景観は、島嶼地域の風水景観と、どのように異なるのであろうか。

## 5. 韓国公州市旧市街の風水景観—内陸盆地の風水—

### (1) 朝鮮半島の生気が集積する虎形局の風水都市

公州市は首都ソウル特別市の南およそ130kmに位置し、行政区としては忠清南道に所属している。約940km<sup>2</sup>の面積の区域に、130,957人の住民が生活している





第9図 朝鮮半島の生氣が集積する虎形局の公州市

渋谷鎮明 (1998)：植民地時代朝鮮の地理思想の転換—山の認識を中心にして—。荒山雅彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求—』、p. 112 より作成。

(2003年現在)。本稿が調査地域としたのは、公州市のうち錦江中流域の左岸に広がる内陸盆地の旧市街の地域である。西暦475年には、百濟の文周王が漢城（現在のソウル特別市）から熊津（現在の公州市）に都を移した。1896年に忠清道が南北に分割されたときには、忠清南道の監營（道庁）が置かれた。管見の限り、公州旧市街は5世紀頃から重要な場所と見なされてきた。

第9図に太さの異なる3種類の実線で示したのが、中国の崑崙山から韓国に生氣を運び込む龍脈を、眼に見える山地の稜線を手がかりにして示したものである。李氏朝鮮時代の韓国では、看龍法によって地形環境を認識する風水が、現代地理学の導入以前までの基本的な国土観を形成していた。この看龍法は、第1に白頭山を中国の崑崙山から発した龍脈を朝鮮半島に導き入れる要の場所であるとみなし、第2に白頭山から朝鮮半島の全ての山へ龍脈がつながっており、そこを生氣が流れていると考えていた<sup>36)</sup>。

このようにして風水の国土観から導き出されたのが、白頭山を要にして朝鮮半島全体に生氣をもたらす龍脈のネットワークである（第9図）。聞き取り調査によると、公州市旧市街の住民は、第9図から次のような巨視的な形局を指摘した。第1に朝鮮半島の形状は、頭を北に尾を南に向けて大きく口を開いた雄のシベリアトラ

36) 渋谷鎮明 (1998)：植民地時代朝鮮の地理思想の転換—山の認識を中心にして—。荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求—』、古今書院、p. 108-126。



(アムールトラ)の姿に見立てることができる。第2に公州市旧市街の場所は、雄トラの生殖器官の部位を占めていると見立てることができる。この2つの見立てを根拠にして巨視的な風水診断を試みると、公州市旧市街は、虎の形局をなす朝鮮半島の中で、特に強い生気が集積する風水の吉相地であることが導き出される。それでは、虎の形局において重要な場所を占める公州市旧市街の景観は、風水論の観点から、どのように意味づけられて秩序づけられているのであろうか。現地調査をふまえて、本稿の観点から風水診断を試みる。

## (2) 公州市旧市街の風水診断—鳥風水に護られた遊学都市—

公州市旧市街は、生気が集積する韓国で屈指の場所であることから、周辺地域から多くの学生が通学する「遊学都市」だといわれている。ここでは現地調査をふまえて風水診断を試みる。

第10図は、北西の方向に流れていた錦江が南西の方向に屈曲する部分の左岸の盆地に広がる公州市旧市街の風水モデルを示したものである。第9図で確認したように、中国の崑崙山から発した龍脈の1つは、白頭山を経て朝鮮半島に到達する。ここから枝分かれした龍脈の1つが、公州市旧市街の南東に位置する中祖山の鶏龍山を經由して、公州大学の附設中等高等学校の背後に位置する近祖山の周峰を経て、主山の鳳凰山と日落山に生気を運んで、風水の理想地である穴を形成する。中国風水と、これを琉球王府が輸入した沖縄風水は、穴の坐向が南北軸をなすように、集落の背後に山を背負う地形環境の場所を吉相地とすることが多い。これに反して公州旧市街の事例は、穴の坐向が東西軸をなしている。

第10図から穴に集積した生気を防護するうえで重要な働きをする砂の地名を確認すると、中祖山は「鶏」、主山は「鳳凰」、青龍は「鷺」、朝山と案山は「鶴」、白虎は「鳳凰」の意味づけがなされていることがわかる。5万分の1の縮尺の地形図をてがかりにして、鮮明な穴の形態を判読する作業は難しい。しかし穴の周囲を防護する全ての砂に鳥の名前が付与されていることから、穴の生気を鳥風水によって護ろうとする意図が大地に刻印されていると解釈することができる。公州市旧市街が、住民から鳥に護られた「遊学都市」だと認識されてきた根拠は、第1に鳥地名の砂が生気を防護する風水モデルを構成していることであり、第2に風水モデルの景観が全体として「飛鳳帰巢形」をなしていることであった。

この事実を裏付けるように、穴の前面に広がる平坦地の明堂には、管見の限り教育機関が集積している。公州旧市街では、百濟大橋の南詰めから附設中等高等学校の正門前を通過して、公州教育大学校に至る直線に近い幹線道路が通っている。この沿線の約2kmの区間だけでも、北から順に、①公州教育庁、②公州中学校、③附設中等高等学校、④鳳凰小学校、⑤公州高等学校、⑥中洞小学校、⑦永明中・高等学校、⑧公州大学校影像保健大学、⑨公州教育大学校、⑩公州女子高等学校が立地している。では、風水によって学園都市の適地だと考えられてきた公州市旧市街の中でも、最も強い生気が集積すると考えられてきた附設中等高等学校の敷地では、生気を学校教育に活用するために、どのような風水が実践されているのであろうか。



第 10 図 公州市旧市街の風水モデル

公州大学校師範大学附設中高等学校所蔵の 1 : 50,000 地形図 (2003 年発行) を基に作成。

### (3) 公州大学校師範大学附設中等学校における学校風水の診断

附設中等学校の敷地は、公州市旧市街に生氣をもたらす穴の場所に位置している。この場所は「飛鳳巢形」の形局の要となる場所として意味づけられてきた経緯から、学校用地としては理想的な場所である。

第 11 図は、附設中等学校内の風水景観の秩序を考察するうえで重要な場所を示したものである。①が穴の場所である。その概観を示したのが写真 8 である。学校の敷地の最も奥まった場所にあり、裏山の裾にあたる。1920 (大正 9) 年に、この場所に日本人が市役所 (忠清南道布政司) を建築したときに、公州市旧市街を眺望できる穴の正面に神社を建てた。写真 8 は、穴と神社跡 (第 11 図の①と②) を示したものである。このような神社の建立のしかたは、風水の立場から見ると、穴の生氣を独占して繁栄を図ろうとする香港の風水戦争を連想させる。

このような「龍脈を断つ」風水術が注目されたのが、韓国の戦後 50 周年記念行事として計画された旧朝鮮総督府庁舎の解体をめぐる問題である。風水の吉相地に建てられた李王朝の景福宮は、国家の繁栄の象徴であった。日本の旧植民地政府は、その正面に朝鮮総督府庁舎を建てることによって、白岳山から流れてきた龍脈を断ち切って王宮の運を遮断するとともに、王宮の南に広がるソウル市街へ生氣が運び込まれる道筋をも断つことによって、二重の意味で韓国の繁栄を妨げようとしたというのである<sup>37)</sup>。こうした日本の旧植民地政府が風水を悪用したと見なされた事例は、韓国で「日帝断脈説」と呼ばれている。野崎 (1994) の指摘によれば、日帝断脈説は日韓両国に関する事柄で韓国人なら誰もが知っているのに、日本人にはほとんど知られていない代表的な逸話である<sup>38)</sup>。

では、この場所の生氣は学校教育に、どのように利用されているのだろうか。附設中等学校教員からの聞き取りによれば、当地の穴の生氣は非常に強いため、穴に集積した生氣が市街地に向かって流れる龍脈の真上には、生徒が学習する教室を配置しないように配慮されている。強い生氣にさらされると、頭痛、身体がのぼせる症状、皮膚がヒリヒリする症状が顕著になるという証言が得られた。このため附設中等学校では、敷地内で最も生氣が集積する場所に校長室と職員室を配置している (第 11 図の③)。

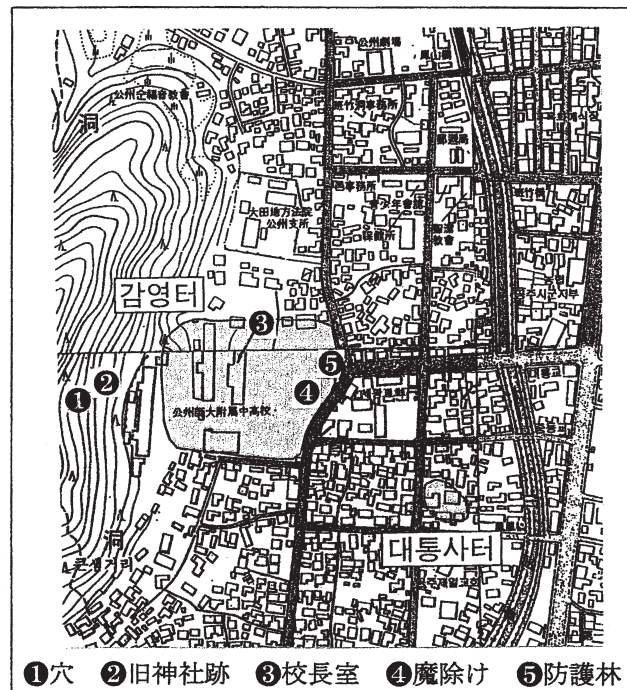
生氣にさらされる強度が、校舎内の部屋の配置を決定する原則になっているのである。最も強い生氣にさらされる校舎の北より場所から順に、校長室、職員室、一般教室が配置される。こうした学校風水を活用することによって、附設中等学校では、教職員の健康の保持増進を図るとともに、生徒も高い進学実績をあげることができると考える学校文化が育まれてきた。

また敷地に集積した生氣を散逸させない風水のしかけも施されている。校舎の裏山にある穴の真東にあたる敷地の東端は、生氣を防護するとともに、外部から侵入

37) 崔吉城 (1999) : 朝鮮総督府庁舎の破壊と「風水」ナショナリズム、日本民俗学、第 218 号、pp. 1-24.

38) 野崎充彦 (1994) : 『韓国の風水師たち—今よみがえる龍脈—』、人文書院、pp. 140-202.



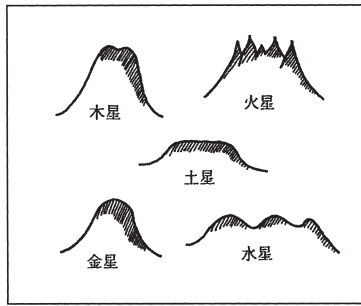


第 11 図 公州大学校師範大学附設中高等学校の風水



写真 8 校舍裏の山裾にある公州市旧市街地の穴 (2006 年 11 月撮影)

する邪気・悪気を撃退するうえで重要な場所である。附設中高等学校は、穴の正面にあたるこの場所に 2 つの魔除けの木造 (第 11 図の④) と、生気の散逸を防ぐための防護林 (第 11 図の⑤) を備えた正門を設けることで、風水論的な環境を整備している。それでは次に、穴から続く龍脈が通過する経路となっている附設中高等学校前の商店街と、周辺の都市景観について考察を進める。



第12図 五星相生・相克の原理

崔昌祚 (1997) : 『韓国の風水思想』、人文書院、p. 70 より転載。

第1表 五星と季節・方位・色の関係

	木	火	土	金	水
季節	春	夏	移行期	秋	冬
方位	東	南	中央	西	北
色	緑	赤	黄	白	青・黒

崔昌祚 (1997) : 『韓国の風水思想』、人文書院、pp. 94-100 より作成。

#### (4) 学校前商店街と周辺市街の風水の診断—五星相生・相克の原理—

ここでは、看龍法の1つの風水診断法である「五星相生・相克の原理」を使って、附設中等学校周辺の風水景観の秩序について考察する。韓国風水では穴の場所を探し当てる方法として、地形環境を重視する風水診断を実施してきた。穴が判明した後は、穴の地形環境に調和した生活様式を確立するために、穴の周囲の山の形をよく観察して、建築物の形や色の吉凶を判断する地相占術が生まれた。韓国風水では、山の形は宇宙の天体が地上で形象を表したものと考えるからである。

第12図は、砂を構成する山の形を木星・火星・土星・金星・水星に例えたものである。木星は木の象徴だから上に向かって垂直に伸びた形、火星は火の象徴だから先端がとがった形、土星は土で大地の象徴だから平坦な形、金星は金属の象徴だから半球形、水星は水の象徴だから波状形をなすと考えるのである。相性が良い組み合わせの「相生」の関係は、次のように考えられてきた。木はよく燃えるため火と相性が良い。火は燃えると土になるため土と相性が良い。土は固まると金属になるため、金と相性が良い。金は結晶して水になるため、水と相性がよい。水は植物を育てるため、木と相性が良いと考えるのである。

逆に相性が悪い「相克」の関係は、次のように説明されてきた。木は土壌の水分を吸収してしまうから、土と相克する。土は水溜りを埋めてしまうから、水と相克する。水は、火を消すから火と相克する。火は金属を溶かすから、金と相克する。金は土壌に混ざると木を枯死させるから、木と相克すると考える。

第1表は、五星の相生・相克を判定するために、五星と季節・方位・色の関係を示したものである。五星は、季節・方位・色にも読み替えが行なわれて、相性の吉凶を判断する指標にされている。それでは、五星相生・相克の原理を使って穴とその前面の平坦地である明堂の主要な都市景観を手がかりにして風水診断を試みる。

第2表は、附設中等学校の周辺市街地における主な施設のうちで、ランドマークとなるものについて風水診断を行なった結果をまとめたものである。診断の「ものさし」は、五星相生・相克の原理である。第2表に示した5つの施設を主体とし、この主体から見た相手を主山の鳳凰山とする。鳳凰山は、全体として半球状



第2表 附設中等高等学校周辺の都市景観の風水診断

No.	施設	形	色	五星	鳳凰山との相性
①	附設中等高等学校	波状の校舎群	青・茶・グレー	水星	相生
②	学校前の商店街	波状の店舗群	茶・グレー・白	水星	相生
③	公州市役所	平坦	青・白	土星	相生
④	教会	尖塔形	茶・黒	火星	相生
⑤	高層住宅	垂直に伸びる	白・青	木星	相克

の形をなしていることから、金星の条件を適用できる。

第2表から、5つの施設と鳳凰山との相生・相克の相性を診断すると次のようになる。穴に立地する①附設中等高等学校と、穴から真東に続く龍脈に立地する②学校前の商店街は、施設が建物群の景観をなしている。建物の高さが、階数と土地の傾斜の状態から不揃いになっている。この様子が波状になっており、水星と診断されるため鳳凰山との相性は相生の吉相である。附設中等高等学校の校舎が、薄い青色の窓ガラスを採用していることも相生である。公州市旧市街で顕著なランドマークが、③公州市役所、④教会、⑤19階の建物が2棟並んだ高層住宅である。公州市役所は、建物と屋根の形を低く平坦に抑える意匠が施された土星で、相生である。茶色と黒の尖塔状の教会は、金属を溶かす火星であるため相生である。ところが2棟から構成される近代的な高層住宅は、垂直に上に伸びる形をもつ木星であることから相克となる。公州旧市街で再開発が進み、これに景観の変化が伴うことは避けられない。しかし、そこから盆地の四周を囲む山との調和を図る、風水による街づくりの原則と秩序が失われていく景観変化の意味を見落としてはならない。そこには、起伏に富んだ内陸盆地の地形環境に適応した風水の地方色を確認できることも重要である。

## 6. おわりに—風水景観の地域性—

人間の最も原初的な環境認識の1つは、周囲の人々や対面した相手の服装・態度・表情・しぐさから情報を解読して、行動の指針を決定することである。また別の場面では、訪問したオフィスにおける家具の配置から、これから対面する相手の社会的地位や人物像を推定することもある。このように人間の社会生活は、「ことばらしいもの」に囲まれている。人間は、本来は情報を伝達することが意図されていないものにまで、身につけた文化的コードに照らして意味を解読する作業を絶えず行っている。社会生活を通じて獲得した文化的コードを物差しにして、周囲の人間を含めた広い意味での環境を解読する行動は、社会生活を円滑に進めるうえで、また異文化を理解するうえでも、危険から生命と財産を守るうえでも重要な役割を果たしている。このような記号論的環境認識は、人間が周囲の環境を理解し、適切な行動を選択するうえで最も原初的で重要な営みである。

ところが本稿で着目した風水景観は、中国の風水モデルを文化的コードとして活用するだけでは解読することが難しい。例えば小浜島では、風水の龍脈が神道に転

化し、主と砂の山々が腰当に転化して新たな意味づけがなされている。このような読み替え操作によって形成され景観を見かけ通りに解読すれば、学習者は「小浜島には中国福建省から亀甲墓は伝えられたが、風水そのものは十分に受容されなかった」と、誤った結論を導き出してしまうおそれがある。このような誤りを防ぐためには、現地調査を通して中国風水モデルと小浜島風水モデルとを比較・同定して、伝播に伴う文化の変容を考慮した解読が求められる。この比較・同定を含む解読作業を、本稿では「解釈」して位置づけることにしたい。小浜島における風水景観の秩序を分析する学習活動には、解釈の過程が不可欠である。

小浜島の部分景観が風水の原則によって全体景観に統合され、秩序づけられていることを発見する段階にまで学習者が到達すれば、次の段階として、景観秩序を解釈する文化圏の学習を展望することができるであろう。中国起源の風水は、東アジアの広範囲にわたって伝播した。東南アジアではシンガポール、インドシナ半島でも風水が伝播したことを実証する研究が進んでいるといわれている。風水文化圏を確定する今後の研究が待たれる。

### 演習問題

1. 水害常習地域で確認された「住み分け」現象のほかに、どのような地域に、どのような「住み分け」現象を観察することができるのであろうか。具体例を挙げて考察してみよう。
2. 日本の伝統的な習慣・習俗やまちづくりに、風水と関係づけることのできる現象はあるだろうか。具体例をあげて、話し合ってみよう。
3. 中国の風水モデルに示された理想的な地形環境の場所は、現代社会において、どのような場所として評価できるのであろうか。
4. 島嶼地域と内陸盆地の風水の相似点と相違点について考察してみよう。
5. 文化としての風水の本質とは何であろうか。

\* 齋藤 之誉(さいとう ゆきたか) 所属/麗澤大学経済学部助教、いわき明星大学人文学部非常勤講師。主要論文/「田中啓爾における地理区教授論の形成過程」(『筑波社会科学研究』、第20号、pp. 39-50)、「郷土地理教育における地理区教授論の展開—秋田県南秋田郡旭川尋常高等小学校を事例にして—」(『教育学研究集録』、第25集、pp. 103-113)、「香川幹一における地誌教授法の形成過程—『略地図+地理区教授』方式の定式化を中心に—」(『新地理』、第53巻第3号、pp. 20-37)等。追記/本稿は、麗澤大学経済学部国際社会系経済学基礎演習に関わる教科書プロジェクトの一環として作成したものである。